

ダニエル・カールの

聞きたい! 消防団

第18回

青森県八戸市消防団

今回は東京から新幹線で約2時間半をかけ、青森県八戸市をお訪ねしました。

八戸市の団員数は1,300名を超え、全国的にも珍しい海上分団などさまざまな組織があるそうです。また、東日本大震災では、大変な被害を受けている中で活動されたことも聞き及びました。

それらの活動内容や団員確保の取組、また防災対策などをお尋ねしたいと思います。

それでは、八戸市消防団の大館恒夫団長、上野玉地副団長と八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部の天下武晃消防司令の皆さんからお話を伺いましょう。



右から、上野副団長、大館団長、ダニエル・カール、消防基金の山崎常務理事、いかずきんズのかぶさん（八戸市のマスコットキャラクター）
（八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部が保管している復原された日本初のタンク車の前で撮影）

八戸市と消防団の概要について

ダニエル 八戸市についての簡単なご紹介をお願いします。

大下司令 八戸市は、太平洋を臨む北東北の東岸に位置する青森県南東部の街です。臨海部には大規模な工業港、漁港、商業港が整備された全国屈指の水産都市となっています。また、国の重要無形文化財である「八戸三社大祭」「八戸えんぶり」などの伝統文化や三陸復興国立公園「種差海岸」などの美しい自然景観に恵まれています。

スポーツでは、スケートやレスリングが盛んで、レスリングでオリンピック4連覇を達成し、先日国民栄誉賞の受賞が決定した伊調馨さんを輩出しています。

ダニエル ちょうどタイムリーな話題ですね（取材は平成28年9月14日に実施）。地元も盛り上がっていると思います。

大館団長 息子は、昔、伊調姉妹とよく練習をやっていましたね。

ダニエル その辺も詳しく伺いたいのですが、今回は、ちょっと時間がありませんので（笑）。八戸市の人口はどのくらいですか。

大下司令 人口は、約23万4,000人です（平成28年8月31日現在）。平成17年の市町村合併で24万9,000人ぐらいまで増えたのですが、どんどん人口が減っている感じです。

ダニエル 続いて八戸市の消防団の概要について教えてください。

大館団長 条例定数は1,548人ですが、現在の団員数は1,356人で、約88%の充足率となっています。その中には、機能別団員が90名（うち、女性は24名）います。定年となった消防団員の中で再任用された者などで構成されていて、任務は主に後方支援となっています。また、

組織については、われわれ正副団長がいる本団と、分団が23分団、班が90班の編成をしています。本団には総務担当、警防担当、予防担当、それから、纏（まとい）振りやはしご乗りの伝統演技を後世に伝えるために設置された技能伝承という担当があります。

さらに特徴をあげれば、八戸は海を抱えているので、海上分団があります。



纏振りの様子（平成28年八戸地区消防連絡協議会観閲式）
（注）八戸消防の纏は10kgを超える飾纏が多く、これを振るには十分な訓練と体力が必要とのこと

ダニエル 珍しい分団ですね。

大館団長 はい。全国的に珍しいと思います。八戸には、以前、陸上を管轄する消防団と、港湾を管轄する「海上消防団」の2つの消防団がありました。私と副団長は、海上消防団出身です。（八戸の）港には、石炭を積んだ船やイカ釣り船が多く入港していて、係留中によく火災が起きていたことから、昭和18年に海上警防団が設置されましたが、これが海上消防団の前身です。海上消防団には、「わかしお」という消防艇が配備されていたことから、たいへん人気があり、入団希望者も多かったですね。この「わかしお」は老朽化のため、平成5年に解役となりました。

新しく船をつくと何億もかかるということや、常備消防や消防団もいろいろ機能が充実し

てきていたことから、消防艇を廃止し、それに伴って海上消防団は解団することとなりましたが、やはり歴史のある海上消防団をそのままなくすというわけにはいかないだろうということになり、「海上分団」という分団を平成6年に設立しました。海岸沿いに屯所と消防車両を配置し、活躍していただいています。

ダニエル 漁港というか港町ならではの特徴ですね。

上野副団長 そうですね、地域性というところに尽きるのではないのでしょうか。



復原された「わかしお」の操舵席を見るダニエル

東日本大震災の時の状況

ダニエル 八戸は、東日本大震災で大きな被害を受けたと聞きますが、この辺りはどのような様子だったのですか。

大下司令 当時の映像がありますので、こちらをご覧ください。

(プロジェクターで上映。津波が川をさかのぼっている様子や防波堤を乗り越えている様子などが上映)

大下司令 この津波による人的被害は、死者1名、行方不明者1名、建物被害としては、全壊217棟、大規模半壊703棟に及んだほか、水産

関連施設や沿岸から近い区域の水田・畑等を中心に壊滅的な被害を受けました。消防団は避難誘導や巡回、救助活動等に奔走しました。

大館団長 当時、消防団は津波がもう寸前まで来ているのに、避難誘導を続けていました。

上野副団長 もう何十年も津波が来たことがなかったものですから(警報を聞いても)逃げないのです。本当に来るのですかと(聞かれて)大変でした。

大下司令 会社や家に戻ろうとする人たちを、消防団の人たちがなんとか止めて避難誘導していました。

上野副団長 息子さんが一緒に来て大事なものを取りに行きたいとおっしゃった方もいたのですが、命とどちらが大事なのだということで、あきらめてください、ごめんなさいと(説得するような)、そういう情景でした。

大下司令 私も現場で避難誘導に当たっていました。橋の上に大勢の人たちがいたので、われわれが行って逃がしていたのですが、消防車のすぐ下まで津波が来たときはさすがに死んだと思いました。(下記写真を参照)



大館団長 八戸市は、港が北に向いているので、三陸沖で起きた津波は直接被害を受けないのです。鯨という出っ張った地域があるのですが、ここで衝撃を和らげてくれるので、いっ

たんここらぶつかりつつ港に流れてくるというところで、地域としてすごく守られています。逆に十勝沖とか、北海道沖で起きた地震による津波だと、おそらく直撃になります。

ダニエル だいたい(津波は)南のほうから来たわけですね。



大館団長 これ(上記写真を参照)は、館鼻漁港で大型の船が丘に上がった様子です。

ダニエル こんな大きなものが上陸したのですか。(津波は)何メートルぐらいだったのですか。

大下司令 最大で4.2メートル以上といわれています。

ダニエル そうでないところまで上がらないですよ。

大下司令 岸壁も破壊されました。ちょうどこのあたり(地図を指して)に防潮堤が出ているのですが、これは先人が津波を何回か受けて守るために築いてくれた財産です。これも破壊されたのですが、かなり役に立ったのだろうと後から言われています。

大館団長 この堤防があってだいぶ(津波の勢いが)和らいだと思います。

大下司令 修理するに当たって新しい素材で、強い津波に対しても壊れにくい粘り強い構造のものに新しくつくり直されました。

災害での活動状況と防災対策

ダニエル 5年半前の津波は未曾有の災害で、消防団の皆さんは大変な活躍をなさったとは思いますが、普段の八戸はどのような災害が多いのですか。

大館団長 市内には、馬淵川と新井田川という川が2本通って八戸を3分割しており、大きな台風が来ると川が氾濫することがあります。また、土砂崩れの被害もあります。先日の台風でも大変でした。消防団は、そういう災害に備えて訓練など準備をしています。各分団には、それぞれライフジャケットを配備しています。



水防訓練の様子(平成28年馬淵川・高瀬川総合水防演習)

ダニエル 馬淵川は確か青森県で一番大きくて長い川ですよ。昔、取材したことがあります。

大館団長 平成23年に大きい台風が来たのですが、その時、馬淵川が大規模に氾濫しましたが、消防団が2日、3日連続で防災活動をしました。これに対して青森県知事から「水防功労賞」という表彰を受けました。

ダニエル 津波といい、水の災害が一番危ないんですね。災害対策としては、どのようなことに取り組んでおられるのですか。

大下司令 東日本大震災を踏まえて、消防団もやはり自分の身を守らなければいけないという教訓を得ました。そこで、自分たちの身を

守るためにどうすればいいかというマニュアルをつくりました。津波が来たときの自分たちの活動マニュアルです。津波が来ると分かっていると、その浸水する所の屯所に集まるかといったそれは間違いですよ。違う安全な場所に集まりましょう、消防団が活動する上で自分の身を守るのも重要ですといった内容です。地域の人と自分の命を守ることを優先しましょうということを文書にしました。

ダニエル やはりまず自分のことを守りましょうということですね。

大館団長 そうですね。消防団員としての活動の前に自分の命を守れないと消防団員に変身できないので。また、自主防災組織と消防団が連携して訓練することにも取り組んでいます。大きい災害になったときは常備消防や自衛隊も、全部に対応できるかとなると難しいので。先日実施された八戸市総合防災訓練でも、自主防災組織と連携して、倒壊家屋からの救出やスーパーの袋などの日用品を使用した応急手当の訓練などを合同で実施したところです。



応急担架搬送訓練（平成28年総合防災訓練）

ダニエル （上記写真を参照）実際に人を担架に乗せて訓練しているわけですか。すごくリアルですね。

上野副団長 毎年3月11日に必ず津波の避難訓練をしています。雨が降ろうが雪が降ろうが関係なく、まち全体で実施しています。その他にも防災訓練もやります。そういう癖を付けてもらったほうがいざというときにやはり役に立つのではないのかと思って、一緒に協力しています。

ダニエル いくら訓練だとはいえある程度実感を持たせて、万が一何かあったときは遠慮せずに早い動きができるようにするためですね。

上野副団長 やはり訓練して経験しているということが大事だと思いますので。

ダニエル あと八戸はやはり気候的にも激しいところですよ。秋の後半から春の前半ぐらいまで、もし何か災害があった場合は、どうやって暖かくするかということも考えて訓練されるのですか。

大下司令 はい。それこそ東日本大震災が冬だったというところもありますので。市では例えば毛布を備蓄しており、消防団も装備の一環として防寒衣をそろえています。実は少し私が危惧しているのは、逆に真夏に（大災害が）来たことがないことです。おそらく真夏に来たら脱水症状になりやすいので、そちらの対策も考えていかないといけないだろうと、担当として思っているところです。

団員確保のための取組について

ダニエル 団員募集の状況はどうなっていますか。

大下司令 当市でも残念ながら消防団員がどんどん減っている状況です。全国の課題と同様に、当市も消防団員の確保に非常に苦勞しています。今までは分団主導の団員確保でがん

ばってきましたが、われわれもやはり事務担当として、てこ入れしなければいけないだろうと思い、団員さんの協力を得ながら新しくラジオ広報番組をつくって入団を呼び掛けて動いております。せっかくなので、ラジオもお聞かせしたいなと思って準備していました。



ラジオ番組の様子（右が大下司令）

大館団長 地元のBeFMを使っています。（ラジオ視聴）

ダニエル ラジオまで使って募集しているとはすごいですね。

大下司令 ラジオでCMを流すだけでなく、番組もつくって流しています。

ダニエル 若い人にアピールするにはいいですね。

大下司令 はい。うちは平均年齢が45歳を超えているので。去年から開始したラジオ放送に加えて、さらに今年はバスに消防団募集の広告を乗せたところ、「(広告を)見たのですけれども」といった電話の問い合わせが来ました。2名しか増員がなかったのですが、今まではずっと毎年30人近くずつ減少が続いたものですから、これらの取組をして2名だけでも9年ぶりに増加したことから、がんばり次第で何かができるのではないかと期待しています。

ダニエル 八戸の場合はどのような方が消防団員になることが多いのですか。

大館団長 地域の伝統芸能をやっている方が多いです。八戸にはえんぶりや三社大祭といったお祭りがあるのですが、それが地域交流の場になっています。お祭りを地域で主導してやっているメンバーはほぼ消防団員です。

上野副団長 屯所は消防団の活動拠点ですが、その活動がないときは、例えばこういうお祭りをつくるために、屯所を有効活用し、そこがコミュニティとなって、人が集まっています。子どもの時にこういうお祭りの練習で屯所に来ていた人が、何かあったらサッと消防団に変身して出動している消防団にあこがれて入りましたという人も実際にいます。

大館団長 消防団員には、地域ですごく重宝がられて活躍をしている方が多いです。そういう方は会社に行っても仕事を一生懸命やりますので、会社も消防団に行ってい、えんぶりに行ってい、三社大祭に行っていと、言ってくれます。

ダニエル 何だか楽しそうな雰囲気ですね。



取材の様子

最後に

ダニエル 最後になりますが、八戸市消防団のご自慢、意気込みなどがございましたらおっしゃってください。

大下司令 八戸市消防団の自慢と言えば、昭和5年に田村義三郎氏により、日本初の3トンの水を積載した水槽付消防ポンプ自動車(タンク車)が製作されたことです。この優れた発明にかけた先人の努力と情熱を忘れないように、錆びついてボロボロになったこのタンク車を丸1年かけて修復し、展示しています。

大館団長 八戸の安全を守るためには、日々の訓練を怠らないことはもとより、冬はえんぶり、それから夏は三社大祭と、やはりこういう伝統文化や伝統芸能を育てて地域のきずなを守ることも、消防団に課せられたことであると思います。いざ有事の際には訓練の成果を遺憾なく発揮して機敏に行動できるよう、市民に愛され頼りにされる消防団を目指していきたいと、私ども正副団長、本部団員、そして各分団それぞれそういう気持ちで取り組んでいきます。東日本大震災でも、間近に津波が迫っていても避難誘導を率先してがんばっていたおかげで、亡くなられた方が最小限に食い止められたことにつながったと思います。やはり私どもは地震イコール津波というようなことを常に肝に銘じて日々の活動をして、これからも市民の負託に応えられるようがんばっていきたいと思っています。

上野副団長 やはり市民に信頼される消防団員になるため、特に若い人を育てていきたいです。

ダニエル どうもありがとうございました。

対談を終えて

消防本部の方が、「居心地が良くて1回も八戸を出たことがないです。」とおっしゃっていましたが、皆さんとの取材の雰囲気から深い地元愛が伝わってきました。

私は今、東京に事務所があって、本当は山形に早く帰りたいのですが、マネージャーが仕事を入れ過ぎるのでなかなか帰れません(笑)。だから東北のこういうあたたかいまちに住むことは、本当にあこがれですね。

皆さんの自慢のふるさとをこれからも守って行ってください。

八戸市消防団の皆さんのいっそうのご活躍をお祈りいたします。(ダニエル・カール)



消防団タンク車



取材参加者と消防本部の皆さん等